
スマブラ☆R P ー喪失者の正義ー

桜坂電波塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマブラ☆RP — 喪失者の正義 —

【Nコード】

N3777U

【作者名】

桜坂電波塔

【あらすじ】

亜空の使者がこの世界を亜空間にのみこませようとした事件、通称亜空事件の終結後、ファイター達はある時両手の神と共にどこかへ消えてしまい、世界中で搜索がされたが、誰1人として見つかることはなかった。

そして、亜空事件から約1年。ファイター達が見つからないまま事件はようやく姿を現す。

「どんな世界にだって完全に正しい正義なんてない」

何が正義で何が悪かも定まらず、中途半端で自己満足的な正義のためには戦う、盲目で喪失的なR P小説。ロールプレイング

※オリジナル率は80%!? 原作設定にオリジナル要素を大量に加えたスマブラアドベンチャーR P。

読みながら頑張ってスマブラ要素を見つけてみよう☆

H P 「神様の忘却書庫」でも同時連載中。

0話 終わってから動き出す物語 ―世界の傍観者（前書き）

基本序盤では原作キャラの名前を出さないことが多いので誰か推理しながら読んでみてください W

0話 終わりから動き出す物語 ―世界の傍観者

この世界の者なら誰でも知っている、とある英雄達の話をしようか。

この世界の東側の大陸を、亜空間からの使者が支配しようとした事件――通称、亜空事件がスマッシュブラザーズのファイターによって解決されてから約一年がたった。事件による実質的な被害をほとんど受けてないこの西側の大陸でも、強大な敵を倒したスマッシュブラザーズの存在は大きな話題になった。

二人の神の元で戦った彼らは、世界中で英雄扱いされ、その名を知らぬ者はいないほどだった。

しかし、彼らは亜空事件が集結してから数ヶ月ほどたったころ、二人の神と共に突然姿を消してしまった。

英雄である彼らの突然の消失に、世界中の国で捜索が行われたが、今もなお見つかった者はただの一人もいない。

「ここは…終点…？」

彼は、一人終点に立っていた。暗闇の中に浮かぶ緑色は、よく目立つ。

…と、そういえばどこかで見たことある気がすると思ったら、彼のかのスマッシュブラザーズの一人だった。
今思い出した。

「なんだ、まだ無傷のファイターがいたか」
不意に、声が響いた。

緑色の彼が声のした方向、つまり後ろに振り向くが、そこには誰もいない。

「な…誰か、いる…の？」

怯えつつも彼は何もない空間に声をかけてみる。

…いや、そこは何もないわけではなかった。

最初の声が聞こえてから少しずつ、そこには影虫たちが集まり始めていた。

そして、彼の目の前で影虫たちは合体しはじめ、何かの形になっていく。

「影虫…タブーは倒したのに…。…一体、君は何者…!？」

「私の名は————」

その言葉が終わるより前に、終点をほんの一瞬だけ光が包み込み、もとの暗闇に戻ったところには、そこには何もなくなっていた。

0話 終わってから動き出す物語 ―世界の傍観者（後書き）

キャラ募集は常時受付中。

感想、評価等もくれるとうれしいです。

1話 それは高校二年の春の事 一桐葉 (前書き)

はい、スマブラRP、学園編からスタート☆
今回は募集したキャラも2人でできます。

1話 それは高校二年の春の事 一桐葉

高校二年の春。入学式および始業式がは既に終わり、新しいクラスという物にも慣れてきた今この頃。乱闘科なんて言う所に入ったからと言って、常人とは違う特別な、非日常みたいな毎日が待っているわけでもなく、普通の高校生と殆ど変わらない日常。

勉強して、部活をして、というこれまた平凡な毎日を過ごすのが、俺こと桐葉の日常だ。

まあ、自分で平凡だとか言っておきながらアレなんだが、俺のクラス…いや、1クラスしかないから去年と変わらない訳だが、これが結構個性的な面子ばかりで。非日常とまではいかないが、なかなか騒がしい毎日を送っているわけだが。

「桐葉！何にやけてんだ」

「ぬあっ！？ちょ、先生、何言ってるんだよ！」

まだ説明の途中だったのになんて失礼な。ちなみに今解説の途中に乱入してきたこの先生は、厳しい時は厳しいが、基本的にはおおらかで面白いので生徒からも結構な人気がある国語教師のだが、別に深く説明する必要はない。

「お前、知らないのか？今日から教育実習生がくる。しかも美人らしいと」

「だから変な妄想してたってか？それはお前らのほうだろ？」

先生の言った事の説明を頼んでもないのにしてくれたこいつは赤坂。俺の昔からの馴染みであり、親友でもある。

「へー、そうなんだー」

そうそう、俺なんかよりこいつらの方が充分青春してるんだって……

「あ、あのー、誰ですか？」

「え？今日から来た教育実習生ダケド…」

「「は…？」」

「あー、春先生、何処に行ったかと思ったらそんなとこにいたのか」
いやいや、え？ちょ：唐突すぎるだろ！

俺は心の中で軽くツツコミをいれておいたが、この人が教育実習生
というのは本当のことだろう。

先生が教壇の上からこの人呼んでるし。

「はい、はじめまして。今日から教育実習生としてきました、春っ
て言います。一応理科担当です」

春先生が教壇の上で軽く礼をすると、クラスの男子共の間で歓声が
巻き起こった。

まったく、わかりやすい性格してるなお前等。

「そういうお前も同類だろうが」

「…黙れ」

そうだよ、俺もあいつらと同じなんだよ、だけどそれがなんだよ！

俺はお前みたいに女に興味が無いわけじゃないんだ！

「…桐葉、さっきと言ってる事正反対じゃないか？」

「そういうお前はいつから俺の心を読めるようになったんだ？赤坂」

「心の声だったのか？ソレ。さっきからだだ漏れよ」

「く、九条！？お、お前まで読心術を…」

「だから声に出てるって言っているだろ」

いきなり会話に横入りしてきた空気の読めない女子、もとい男勝り
な性格のこいつは九条。こいつも赤坂同様幼馴染なんだが、俺より
強い。喧嘩したらほぼ確実に負けるだろう。

「それより、今日の部活は出てこれるの？桐葉が昨日暑いからって
水飲みまくって腹壊して休んだせいで結局何も進まなかったんだが」
九条、時制の関係で読者の皆さんにばれる事のないはずだったこと
をあっさり暴露しないで欲しい。

そもそも、今はHRの最中なのに斜め前から俺の方を向いて喋るの
もやめて欲しい。さっきから先生の視線が痛い。

「まあ、今日は大丈夫だと思うぜ。たぶん、だけど」

「ちなみに春先生は教育実習の間中、俺たちの部活に来ると聞いているが」

「絶対大丈夫☆というか意地でもいく！」

「赤坂：お前、桐葉の扱いうまくなってるわね」

それから放課後まではあっという間。

いつもどおりにつまらない授業を適当に受けて購買で焼きそばパンを奪取して、午後微妙に真面目な態度で受ける。

九条も俺と似たような感じだが、たまに先生の言葉にダメだしし、口論の末に勝利する、と言ったこともあるが、正直言うとなだの授業妨害でしかない。

それでも赤坂なんかは根が熱血で真面目なので、普段の授業も真面目に受けていて成績もなかなかいい。そこところ俺とは正反対だ。：と、そんなことより放課後だ！昨日ぶりに部活に行かないとな。ここ1週間部員たちの議論は白熱する一方で結構楽しいんだよな。って言っても、まだ部活の説明をしていなかったからこんなこと言ってもよくわからないよな。

俺たちの所属する部活は新聞部。校内に掲示する新聞を作成する部活であって、野球部が何をするのか理解できればどういう部活かわかるだろう。

俺と赤坂と九条、さらに4人が部活のメンバーだ。さらに、暇人のためよく顔を出しに来るおっさん、もとい新聞部OBも顧問がわりと言ってもいいくらいよく顔を出す。

ちなみに顧問はいるのだが、面倒くさがりで、なかなか部活に出てこないの、実質全ての権限は部長が握っているに等しい。

お、色々と説明してる間にもう部室前だ。

中には：もう数人いるみたいだな。

「よっ、昨日ぶりー」

「先輩。もう腹大丈夫なんですか？」

「野々宮：1日たっても直らなかつたらさすがに病院行ってるぜ」

ドアを開けるなり言いよってきたチビは野々宮。いつも帽子をかぶっていて、頭もよく、運動神経もなかなかだ。普段敬語なんて使わないから今のは当然嫌味とかそんなものだろう。

「まあ、とにかく、6人そろったから部活を始めようか」

そしてこうい^{ウタ}は雅楽。学ランを着ているので男だが、中性的な顔、声質からして、女と言われても騙されそうな気がする。というか本当は女じゃないのかとも思っている。

「もう始めんのか？まだ部長いないだろ」

「桐葉、部長は今日から2日模試だからね。勉強とかあると思って」

「雅楽、お前、部長がそんなことで部活休むと思ってるのか？」

あいつはそんな直前に必死こいて勉強するようなやつじゃねーだろ」

「悪かったな、必死じゃなくて」

その声が聞こえるのと同時に俺の頭には強い衝撃が。

そして今日の前には床。どうやら後頭部を殴られて倒れたようだ。

「部長：いつもそんなだといつか逮捕されますよ」

「お前も殴ってやろうか？」

「阿久津：藤龍がまたマゾに突っ走るんでやめてくれないかしら」

「マゾっていうなよ！」

いや、それより俺を助けてくれない？

まじで頭が大ダメージなんだけど！

「…というかお前は自分の置かれている状況に気づけ」

赤坂に起こされてようやく気付いた。頭がやたら痛いのは、部長に踏みつぶされてたからだ。

そう、新聞部部长こと阿久津はドS鬼畜、唯我独尊…。俺様最強な人だ。

まあ、結構優しかったりもするが、怒ったときが半端ない。本気を出せば鉄パイプをも握りつぶすらしい握力。万能すぎて「こいつに出来ない事とかないんじゃないか？」と思われているほどだ。

「：阿久津、お前明日も模試じゃないのか？」

「ほぼ確実に全教科満点だから問題ない」

ほらな、この余裕の態度。俺なんかとは天と地ほども差がありすぎるぜ。

「じゃあ、今日こそ次の企画、決着をつけましょ、210高校七不思議か先生質問攻め」

九条、お前テンションやけに高いな…って、そうか、こいつ口喧嘩大好きだからな。

「ああ、その件ならもう決定だ。片方は職員室で少し漏らしてしまった時強く反対されたんでな。いや、あれは必死すぎて何故写真を取っておかなかったか不思議なほどだ」

「ってことは質問攻めが却下？」

あー、藤龍は質問攻め推しだったからなー、Mのくせに。

「Mは関係ないだろ！」

あ、また口に出てたか？

「ああ、そうだ。質問攻めが却下された。」

「じゃあ、七不思議決定だね！やった！」

七不思議か…。本物とか…まさか、出ないよな？

そんな俺の心配を思い切り無視して、後にある事件が起こることになるんだが、それはまた別の話。

その時がくれば、誰かが語るだろう。

俺たちの学生生活最後の一日を。

1話 それは高校二年の春の事 一桐葉 (後書き)

今回は、藤龍さんと、hhhさんリクエストの春をださせてもらいましたー。

勿論これからもたくさん出ますよー。

まだ出していないゲストさんも、ほとんどがそのうち出せると思うので、お待ちくださいー。

募集も一応まだ継続中です。

2話 嵐の前の静けさ ー雅楽(前書き)

今回は雅楽視点です。

ちなみに、前回で既にスマキヤラは5人出てるんですが、誰が誰か分かるでしょうか？

2話 嵐の前の静けさ 一 雅楽

ふう、これでやっと全員集合か……。桐葉の奴、水の飲み過ぎで腹壊すなんて君はどこの馬鹿なんだい……。まあ桐葉の事は置いておくとして、さっきからもう一人誰かの気配を感じるんだよね。確か部長が桐葉を殴ったあたりからだ。気になるし、部活を始める前に確かめておこうか。

「んじゃ部活始めんぞー」

「ちよっと待ってくれないかい？」

「ん、どうした雅楽^{うた}」

一体何なんだろう。この人ならとうに気づいてるだろうに。やっぱり僕にはこの阿久津という人がよくわからない。

まあ、考えてもどうせ答えは見つからないから、僕は扉の目の前まで辿り着いたところでその思考を中断する。

「きゃあ」

ガラツと扉をあければそこに居たのは女の人。一体誰だろう。

「あれ？春先生？どうしたんだよそんなところで」

「あ、えっと、入ろうと思ったらなんか皆話しこんでるみたいだったから入りづらくて」

どうやら桐葉の知り合いらしい。というか、先生と呼んでるから先生なのだろうが、こんな先生うちの学校にいただろうか。

「桐葉、誰だい？その人」

九条や赤坂は知ってるような顔をしていて、野々宮や藤龍は全く気にしていないようだったのでとりあえず僕は桐葉に聞いてみることにした。

「ああ、雅楽は3年だから知らないのか。この人は理科の教育実習生の春先生だ。生物とか物理とか何の担当かは知らない。聞いてない」

「あ、春です。よろしくお願いします」

なるほど。それにしても教育実習生なんて珍しい。この乱闘科は例のスマッシュブラザーズの行方不明事件以来廃れる一方で、教師数も生徒数も年々減ってばかりだというのに、何故こんな学校に来たのだろう。それに、何故数多くあるある部活の中から新聞部に…。

「まあ、あんたも入れ。今次の企画の準備に入るところだ」

それと何故阿久津は初対面の先生に対してここまで敬意がないのだろうか。いつもの事だけど。

「あ、あなたが部長の阿久津君ね。よろしく。私は何をすればいいの？」

春先生はもうすっかり新聞部に溶け込んだらしく、やる気満々で阿久津に聞くと、阿久津はどこから取り出したか不明な紙束を春先生に向かって投げ、ついでにカメラも投げた。落として壊したらどうするんだろうか。

「とりあえず今週末の夜に取材する。週末までに全員それを読め。ついでにその先生にカメラの扱い方等、教えるべき事を教えておけ」そう言うと同じ紙束をさらに取り出し、全員に投げ渡した。というか…週末は二日後なんだけど。

「待ってよ、阿久津！。今日はこれで終わりなの？」

全員に紙束を渡すとすぐに出て行こうとする阿久津を見て、野々宮がさかさず声をかけた。確かに、まだ始めてから10分もたっていない。

「ああ。俺には少しやることがあってな。当日まで顔をだせない。後は任せたぞ」

「永遠に戻ってこなくていいですy：ぎゃああああ！」

任せたって…どういうつもりなんだろう。阿久津の事だ、どうせ試験勉強とか、そういうのはまずないだろう。皆はたいして気にかけてないようだけど、僕としてはとても気になる。

どうする…ついていてみるか…？

「おい雅楽。どうしたんだよ、ボーっとして」

「あ、悪い桐葉。…で、今から何をするんだ？」

やっぱり後をつけるのはやめよう。悪趣味だ。それに、あの阿久津のあとをつけていって、気付かれないはずがない。無駄なことをして阿久津を怒らせたなら地獄を見る。

「何って、カメラの使い方だろ。俺達よりお前のが教えるのうまいんだから、春先生に教えてくれよ」

扉が開く。中には2台のベッドに葉棚が数個。中に漂う清潔な雰囲気から、ここが保健室であることは誰の目からも明らかだ。

「おい、無神。いるんだろ？」

そんな保健室に入ってきたのは阿久津。まるでそこに居ることがわかってるかのように無神という名前を呼びながら唯一カーテンのしまっているベッドに近寄っていく。

「…やっぱりここか」

カーテンを開けると、ベッドの横の椅子に座る白衣の男、保険医の無神がいた。

彼の横のベッドには、ぐっすり眠る女の子が。

「いつも眠ってるんだな、そいつ」

「そうだな。相変わらずいつ起きるのかは俺にはわからん。…で、どうだった？阿久津。俺の読みは当たってたか？」

「ああ。確かにお前の言うとおりであった。となるとやはり、望みは薄いのか？」

彼にしては珍しく、諦めかけたような口調。何を話しているかはうかがい知れないが、その口調から深刻な事だという事だけはなんとか知ることができる。

「いや、まだだ。確かにあちら側からやってきた者はいるが、それが奴等とは限らない。それに、仮に奴等だとしてもまだ少ない。充分に対処のしようがある」

「：なあ、奴等の狙いは何だ？」

「勿論お前だ。奴等はお前がここにいることを知っている」

その言葉を聞くと、阿久津は一瞬悔しげな表情をした。部員達、いや生徒たちから怒らせると地獄を見るとまで言われている『あの』阿久津が。

そして、彼は少し間を開けてから重く切り出す。

「：ファイターがここにいるからとは、考えられないか？」

「考えられなくもないが、わからない。俺には、ここにファイターの気配は感じられない」

無神の方も少し間をおき、しっかりと言った。

「：で、これをこうして：そう。それでいいです」

「ありがとう。ようやくわかったわ」

「いえいえ、桐葉なんかより断然早いです」

「雅楽！お前、それは言うなっっていつてるだろ！？」

そんなことを言われた覚えは記憶の片隅にもない。

あれから約1時間。春先生は覚えが結構早く、新聞部についての説明、役割分担等全てを理解してもらえた。

「こうしてると思うけどやっぱり桐葉って馬鹿だよなー」

「藤龍、覚悟！！」

「おい、なんで俺の時だけ襲ってくるんだよ！」

うん、相変わらず桐葉と藤龍は仲がいい（！？）ね。

「じゃあ皆。今日はこれで解散にしようか。春先生、確か家が遠いので寮に入るんだったよね」

「あ、うん。寮母さんに特別に許可してもらったの」

「じゃあ先生も一緒に帰れるね！」

「うん、そうね。じゃあ、行きましょ」

「俺運動したら腹減ったぜー。早く帰って夕飯食べようぜー」

「藤龍、桐葉はどうしたの？」

「ああ、九条さん。あんなのは返り討ちにしましたよ」

「…本当、藤龍は桐葉にだけは強いわね」

本当、それは疑問なんだけど、ついでにどうして学年が上なはずの藤龍が九条には敬語を使うのかも謎だ。どうしてだろうか。

「…あ、ごめんね。私、職員室に忘れものしてきちゃった」

ちょうど校門周辺あたりまで来たところで急に春先生が言った。

「…俺がとってこようか」

「あー、いいよ、赤坂君。私取りに行ってくるから皆は先に帰ってて」

「でも、結構暗くなってきてるから、危険ですよ」

「資料にあった七不思議に会っちゃうかもよー」

「あー…だ、大丈夫！私は先生になる人なんだから！お化けなんかにビビってられないのよっ！」

「資料にあったのはお化けじゃなくて幽霊だぜ」

「わ…わかってるわよ！じゃ、行ってくるわ」

誰の目にも明らかな虚勢をはった春先生が戻っていくのを見送った僕等だったけど、後から思えば、この時僕等が春先生について行っていれば、いや、もしくは赤坂が取りに行ってやることを春先生が了承していれば、あんなことにはならなかったのかもしれない。だけどそんなこと、今の僕等には知る由もなかった。

2話 嵐の前の静けさ 一 雅楽（後書き）

今回は前回に引き続きの藤龍と春に加えて、
零神さんリクエストの無神を出させていただきました。
実はもう1人でてるんですが、まだ名前を出してないのでまた今度
紹介させてもらいますー。

感想等、お待ちしておりますー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3777u/>

スマブラ☆RP ー喪失者の正義ー

2011年10月7日19時33分発行